

はじめの一歩

障害のある人を理解する



第1回 信頼関係を築くことの むずかしさ、おもしろさ



全障研埼玉支部
細野浩一

ほその こういち／1954年生まれ。養護学校、ろう学校で18年間勤めた後、ろう重複障害者の共同作業所を立ち上げる。それ以降30年近く、成人期の障害のある人の福祉に携わる



好きなことにとことん付き合う

大学を卒業し開校2年目の小さな養護学校の教員になり、小学部新1年6名のクラスを担当しました。

その内の3名は重度の知的障害の自閉スペクトラムの子どもたちで、学校へ着くや教室を飛び出していき、あいさつのかえさせませんでした。手洗い場でバケツなどに水を勢いよく出してぐるぐる回る渦やはねる水しぶきに目を輝かせる

しかし、駆け出しの頃は障害のある人の思いや苦しみを理解することもできず、ねがいや思いに応えるとりくみを組み立てる力量も専門性もない中で空回りしてしまい、とりくみの糸口が見いだせずにいました。そんな失敗だらけの実践の中でも、障害のある人を理解する上で大切なことを学んできました。

せいちゃん、ロッカーの上にのって両手でリズムをとっているひでくん、広告を手で器用に小さくちぎって山をつくっているかずくん。

私はそれらに付き合いながらもなんとか教室へ連れ戻るタイミングばかり考えていました。今だと思って、声をかけ蛇口を閉め、手を引こうとしても、せいちゃんは手を振り払います。紙ちぎり遊びに熱中しているかずくんは床に膝を打ちつけてパニックとなってしまいます。

3名の担任で議論を重ね、日課を思いきって変更することにしました。まず、学校に来たら、それぞれの好きな活動にとことん付き合う、その後、幅をもたせた時間に教室に戻り、そこにいるメンバーで着替え、朝の会に入るという変更でした。

せいちゃんの水遊びも中断するのではなく、小さなゴムボールをこちらで持ち込んでみるとバケツの中で浮き沈みするのを気に入つて、次にはせいちゃんがおもちゃ箱からいろいろ持ち出して遊びを広げるようになつていきました。せいちゃんにとつて、私が水遊びの邪魔をする存在ではなく、新たな遊びをいつしょにつくってくれる存在にならなくてはと学

んだ経験でした。

子どもが主役の活動

養護学校義務制（1979年）が施行された年から3年間は、訪問教育を担当しました。その中に東京から転居してきた先天性筋ジストロフィーのいまえちゃんがいました。

家庭に訪問して一对一でのシチユエーシヨンも初めて、本人のこともわからないうちでの手探りの連続でした。うたそびと称して学校のリズム運動でとりくんでいる曲やわらべうたをカセットで流して、歌いかけながら、体にふれたり、リズムをとつたり。また、ボアや軍手で作った人形や、フェルトで作ったお菓子や動物などの手に取れる教材を持ち込んでみたりもしました。しかし、いまえちゃんの表情は硬く、自分からすぐに姿勢を崩してしまい、どうしたらよいか悩みました。

そんな私を救つてくれたのは、お母さんの「いまえは、先生が来るのがわかるみたいなんです」との一言でした。

発達的には1歳前後と思われるいまえちゃんがどうしてわかるんだろう。お母さんと話していくうちに、私が訪問する

日はお母さんが朝から部屋の掃除をしたり、化粧をしたり、いまえちゃんも服を着替える、こうした日には先生が来るとの経験から、見通しや期待がもてるようになりました。その中の意味があるのか自問していた時期の私に、勇気と確信を与えてくれました。母親や家族以外の人が関わる経験が、いまえちゃんの世界を広げ、生活のメリハリ、見通しをつくるていくことはつながっていくのだと。

それからは私のとりくみ方にも余裕が生まれていきました。それまで私が演じていたボアの指使いの人形をいまえちゃんの手に通して、その人形に私が声をかけたりしてみたら、いまえちゃんが人形に歌いかけたり、小さなちやわんでお茶を飲ませようとするなどの様子がみられるようになりました。

つい向き合つて一方向的に働きかけることに注力しがちでしたが、いまえちゃんを主役にした活動をつくり、それをいつしょに共有、共感しながら広げていくことで、いまえちゃんと私の距離も縮まり、お互いに生活や活動をつくり、楽しみあえる関係が育つていくことを学んだ経験でした。

今月のはじめの一歩『信頼関係を築く』

- ・みんなの職場などでは「障害のある仲間（利用者）の好きなこととことん付き合う」機会がありますか
- ・本人を主役にした活動をつくり、それを一緒に共有、共感するってどういうことでしょうか